

超えるのではなく辿る、二つの文化

学際、挑戦から日常へ。

安藤妙子＋後藤彩子＋櫻井悟史＋プラダン・ゴウランガ・チャラン＋

二谷宗一郎＋村田純＋宮野公樹

言うまでもなく、学際や分野越境という言葉は、明らかに分野間の壁の存在を認めている。この「あたり前」に敏感になる難しさと同様に、学際や総合知^①なるものがよしとされている今日において、その理由に疑問を持つのもまた難しい。なぜ「学際」がいいのか、と。

ここで、世間は「課題解決」を持ち出す。複雑化した課題を解決するには複数分野の連携が必要である、と。それはその通り。しかしそれは理由の半分ではない。

学際(性)とは、学問本来の性質なのだから、それが学問であれば必ず学際なのだ。したがって、やたらと「学際研究」という言葉を用いる現状は、我々の学問が如何にその常態としての学際から離れてしまっているかを端的に表している。

いわゆる学際推進の真に目指すところは、学際研究の定義(multi-やら、inter-やら、trans-disciplinaryやら)でわいわい盛り上がることもなく、政策誘導で学際研究^②



左から村田純、ブラダン・ゴウランガ・チャラン、安藤妙子、後藤彩子、櫻井悟史、三谷宗一郎
撮影 宮野公樹

なるものを促進させることでもなく、学際研究という言葉の消滅でしかない。

そろそろこのことに気づき、いつかはこの「学際ブーム」も終わるだろう。が、果たしてどう終わるのか。また次のなんちゃらブームはもういらぬ。まっとうな専門主義（専門第一主義ではない）に立ち返ればいいだけである。冒頭に書いたように、専門間の壁というのは便宜上および制度上ありはするが、学問の歴史をみてはつきりわかるように、本来の専門とは全体、すなわち根源を知るための一つの入り口（切り口）でしかなく、文字通り、専「門」なのだ。

本連載は、そのまっとうな専門観を今日を生きる研究者にて取り戻そうという挑戦として企画された。これまで、いわゆる理系、いわゆる文系の研究者合計六名が集まり、各研究室を互いに訪問しあつてその研究現場を体験してきた。

単なる研究紹介や研究室訪問にはとどまらず、各自の論文誌を見せ合ったり、各自のメインの学会の様子を伝える他、「あなたの分野のよくある一日、一週間、一年

間のタイムテーブル」や「あなたが学生指導の際によく使うフレーズは？」といった日常活動の(苦悩の)理解に努めた。総じて、他分野への切れ味鋭い問いを発すると同時に、自身の見地の狭さを実感するといった両輪的な深い学びが得られたのは、これまで連載してきたとおりである。

第四回目となる最終回は、その総仕上げ。と言っても六人が集まって感想を言い合うようなぬるいものにしたくないし、「学際とはやはりこうであつた……」といった風に、これまで話し書いてきた内容をきれいな文章で長々と言い換えて締めくくるのも逆にカッコ悪い。

そこで、いかにして内省的な学びを真に血肉とするかを話し合った結果、以下、二つの挑戦に挑むこととなつた。

挑戦1 ランダムに集められた様々な分野からなるこの六名の研究者で共同研究はできるのか？

挑戦2 結局、自身の本丸の研究進展に直接的に寄

与することを諦めない共同研究はできないのか？

世間でよくみられる学際研究は、得てして分業的である。例えば、環境学の研究者が経済学の研究者と組んで、環境変化の影響を経済効果の観点から考察するような学際研究。他にも、膨大な文学作品を情報科学の手法を用いたテキストマイニングを駆使して、新たな傾向を見出すような学際研究等。

なるほど、特定の分野における研究を進展させるために、他分野を活用する事例は極めてわかりやすい学際研究ではある。しかし、それはあくまで特定分野の研究進展のための共同であつて、その手法が学際的ということであろう。それはわかりやすいし、チームングさえうまくいけば学際研究は容易い。

他方、学際とは学問の性質、より大胆に言うなら学際Ⅱ学問とする観点からは、この分業は学際研究とは言い難い。なぜなら、多分野でチームを組もうが、所詮、とある一分野の研究発展が狙いだからである。

そのような分業的な学際研究とはまた異なる学際研

究、つまり、専門は入り口、門であり研究を進めれば必ず他の門から入った探求者と接触することになるのだから、その接触地点において対話、共同は可能ではなからうか……これを検証すべく、ランダムに集められたこの研究者六人で一度本気で共同研究を提案してみる。これが挑戦1の詳細である。

ただし、この挑戦を極めて現実的に考えると、分業的共同研究であれ、接触地点でのメタ的共同研究であれ、それは参画した研究者自身の研究進展に直接的に寄与ににくいという事実がある。

分業的共同研究の場合、その主たる研究分野の研究者は確かに発展はしているだろうが、「手を貸した」分野の研究者にとつては、本来の自身の研究が進展したとは言にくい。

また、メタ的共同研究の場合も、研究者自身の(特定分野の)学会論文誌に、そのようなメタな研究テーマは投稿しにくく(例えば、生物学の研究者が、動物心理学と行動生態学が生まれた歴史的経緯について考察した論文等)、結局、どこかの媒体にてエッセー的な読み物に

しかならないのではないか。

そうであれば、いわゆる学際研究が進展しない理由もよくわかるというもの。自身の成果になりにくい研究を、自身の学びのためのみに積極的に行おうとする研究者は、(それこそが研究者ではなく学者なのであろうが)今日の世知辛い学術界には少数派であろう。しかし、それでいいのか。

繰り返すが、学際は学問の本性である。それを実施することが成果につながりにくいという学術界を許して、それは果たして善きことと言えるのか。⁽⁶⁾

そこで我々は先の挑戦2を掲げ、できれば各自の成果にもなる分業的でない学際研究を立案することにした。以下、この二つの挑戦を巡つての大混乱をありのままお伝えする。

2023年4月10日 @Zoom

この日は共同研究の方向性の確認と、できれば何かしらの共同研究の形が得られればいいという期待の下、研

究者らがZ o o mにて集合した。

すでに各自の研究テーマはよく理解しているため、直ちにどのような共同ができるかを検討すると思いきや、あえて、各自に改めて「あなたが追っている『不思議』とは？」に回答を求めるところから始めた。「研究テーマ」もしくは「問い」ではなく、あえて「不思議」としたのは理由がある。

研究テーマと聞くと、研究者は文字通り自身の研究テーマを語るが、それは得てして個別専門領域における「問い」を含むと同時に、どこかしら既にパッケージ化されたような固定的印象がある。つまり、他者、他分野を寄せ付けないのだ。

そこで、つけ入る隙、余白を持たせるべく、あえて「不思議」を問うた。この言葉は、課題解決的要素を薄め、研究者の素朴な原感覚を引き出す。

その抜粋した結果は、以下のとおり(あえて口語体にて記述する)。

・ 政策が生まれる瞬間

官僚は、新しいアイデアをどう生み出して、政策をつくっているのだろうか。そのアイデアの淵源は過去の議論や、現場。そこからどうアイデアを見つけるのだろうか(二二谷)

・ 人間の生き方、楽しいだけではダメなのか
娯楽文化と社会問題など、対立する要素が世の中に溢れている。それに対して、世の中はどんな答えをだしてるんだろう。どんな理屈でやっているんだろう(櫻井)

・ 文化、分野の違いは乗り越えられるか
文学・芸術作品、なぜ人は別々の読み方、感じ方、捉え方をするのか、理解の仕方が異なるのか(ゴウランガ)

・ 植物と土壌の関係

土壌環境で植物が果たしている役割を知りたい(村田)

・スマートフォンサイズでの物質の挙動

通常の我々が暮らしているようなマクロな状況と、マイクロナノオーダーでの物質の挙動、特性は大きく異なる。それが不思議で面白い(安藤)

・昆虫や動物の生きよう

人間とは違う生き物たちの生きる術、システム。それが不思議で面白い(後藤)

2023年5月15日 @ Zoom

前回あげた各自の不思議は、具体的な共同研究を生むための土壌のようなものであり、これが満たされれば各自は「嬉しい」ということになる。

そこで、この六つの不思議を同時にみたく共同研究を考えるわけだが、今回は、それだけでは不十分。その共同研究が各自の研究進展にどう寄与するかを検討しなければならぬ(挑戦2)。

そこで、なんらかの共同研究を六人でやった「結果」として各自が何を得られれば自分自身の研究が進展したと感じられるかを考えた。その抜粋を以下に列挙する。

政策立案という途方もない仕事の生まれる瞬間、アイデア創発の挙動が判明し、今後の調査の新たな切り口が見つかること(行政学・三谷)

学問とは何かを考えるうえで、人間とは何かを問う新たな観点を得られること(文化社会学、犯罪社会学・櫻井)

同じ作品をみても感じ方が違うのは、各自がもっている原体験、原背景、原感覚が異なるからという当たり前の事実だが、その当たり前を自覚、内省する道筋について、新たな知見を得ること(日本文学、比較文学・ゴウランガ)

あるバクテリアが植物に及ぼす影響について様々な

分析等を行ってきたが、他分野からの視点を得て自分の研究の見方が変わり、まだ誰も手を付けてない科学のやり方に着手できればいい(植物生化学、植物特化代謝・村田)

単結晶シリコンの微細構造解析やその強度計測方法等について追求する新たなアプローチ方法を得ること(マイクロ機械工学・安藤)

アリの精子貯蔵の研究において、わからないから知りたいと思ってやってきたが、何がどう判明すれば「わかった」と言えるのか、そういった学問の観点から今の研究を見つめることを学ぶことで、今後の研究方法や目的がより深まること(昆虫機能学・後藤)

正直言って、これらが出揃った段階で挑戦2は早くも諦めつつあった。改めて上記を眺めると、「自身の研究により効果、影響を及ぼす」といった副次的な効果の期待が目立つ。さすがに直接的に各自の研究進展に貢献す

るのは困難と結論づけざるを得ないか……。

ただ、これは考えてみれば当たり前のことではある。他分野と共同するのだから、直接的に自身の分野の進展になるのは分業的学際研究における主たる研究者のみであろう。しかし、このままでは終わらせたくない。

せめて副次的効果であっても各自にとって、「面白かった」「知れてよかった」程度ではなく、比較的具体的な成果として、自身の研究のアプローチ方法に新視点が導入されることや、研究目的の理解がより深くなって研究テーマが重層的になることを獲得目標にすることでも、十分、挑戦と言えるのではないか。他の分野の研究進展に役立つ分業であっても、メタ的な共同研究であっても、しっかりと自身の研究進展に寄与することを求めてもいはずである。

そこで、挑戦2はその獲得目標に幅をもたせることとし、引き続き挑むこととした。

2023年6月30日 @サントリー文化財団

ついに全員がリアルに集まり、共同研究立案の肉弾戦を実施。全員で四つの共同研究の概要を考えてみた。次ページの表はその結果である。

ここに至るまで相当な苦勞を要したことを強調したい。本当に難しかった、苦しかった。もちろん付け焼き刃な感否めないし、荒削りでまだまだ熟考は要するが、少なくとも全員で汗をかいて絞り出した最大限がここにある(実は、当初は本気で科研費等の研究助成金に応募するつもりでやっていた)。ぜひじっくり読んでいただきたい。

結果的に、これは本当に結果的なのだが、ランダムな六分野にて共同研究を考えるにあたって、どうやら四種類の研究形態があるように思えた。

タイプAは、メンバーの一つの分野を主題にし、他の分野の視点を追加する構図のもの。

タイプBは、六つの分野にはなかった新たな主題を追加して各分野の視点を並列的、複合的に織り交ぜる構図のもの。

これらのタイプA、Bは分業的学際研究の範疇と言え

よう。

ただし、先に述べたように分業的であっても各自にとって「お手伝いした」以上に具体的に得られるものを求めることにこだわっている。

次に、タイプCは、六人の研究者が研究を進める上で共通して考え持つ(持たなければならぬ)視点について考察する抽象度の高い主題のもの。

最後のタイプDは、各自の研究を研究するような、研究方法に関するメタ的、客観的なものである。

そして、面白半分に評価欄も付けることとした。みなさん、ぜひ五段階評価で○をつけていただきたい。その際、どんな評価軸を想定するかは、あなた次第。本質的、根源的か? 学術的意義が認められるか? 等。

C	D
<p align="center">抽象度を上げた共同研究</p>	<p align="center">各自の研究を研究するような メタ的な共同研究</p>
<p align="center">〈人間〉という方法の検討 —AIに学問は可能か—</p>	<p align="center">各専門分野における個別と総体、0と1</p>
<p>言うまでもなく、どのような専門分野の研究であれ、それは人間がするものである。人間以外が何かを研究したり、学問をしたりといったような考えは、想像上の話、思考実験の範疇にあった。しかし、生成系AIの登場によりこの考えは一気に現実のものとなる。このような現状をふまえると、研究、学問についての再考は必須であり、特に、研究や学問にとって「人間は必要か」ということを検討するのは喫緊の課題といえる。さらに具体的に考え詰めるなら、いわゆる文系、理系の研究において、研究者である人間がどのように位置づけられるのかに注目する必要がある。たとえば、歴史研究の場合、史料をテキストデータ化し、それを学習したAIに歴史を書かせることが可能かといえば、そのようなことはない。</p> <p>人間はなぜ学問を必要とするのか、学問にとって人間は必要なのか。この問いをそれぞれの専門分野のなかで問い、意見を持ち寄ることを通して、学問全体の未来を探求する。</p>	<p>各専門分野は歴史を持っている。目的や対象、手法は異なれどその事実は変わらない。各分野がどのような経緯で今に至るのか。特に、科学(技術)の前後に注意しながら各分野の歴史をたどり、その変遷を比較することで分野ごとの特性を表顕させ、学問の全体像把握に挑む。</p> <p>切り口の一つは、例えば、個別と総体、特殊と普遍がある。特殊的事実はどのように普遍的事実と接続され認められるのか。再現数やN数(母数)という計測可能な実態に頼る分野もあれば、人間の本性こそに立脚する分野もある。または、「在る」と「無い」。可視・不可視が在ると無いの境界なら感情は? 法則は? 精神は? 生死は? あらゆる分野におけるこの0と1の観念を調査する。</p> <p>なお、専門分野ごとの特性を詳らかにするものの、当然ながらそれらに優劣はない。なお、本研究は今日、科学の物差しに支配されがちな状況にも問いを打ち立てるねらいもある。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ●学問の変容 例えば、科学技術以前の世界。川は絶えず流れを変え、氾濫し、そのつど人間は暮らしを移動させてきた。そのような時代の学問と、現代の学問は間違いなく異なるはずである。ではどう異なるのか。歴史的観点から人間の営みと学問の考察を行う。 ●研究推進における人間 分野ごとに研究の手法は異なるものではあるが、いずれも人間を通してという事実は不変である。であれば、人間は学問にどう影響を及ぼしているのか。物質科学、植物、昆虫、行政学、文化社会学、文学等において、人間中心の考え方になっている箇所を徹底的に点検する。 ●人間以外の目線 人間以外の目線を取ることは人間には不可能である。しかし、どこまで不可能なのか。生成系AIとの対話から、学問の根底にある人間の正しさについて探究を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ●上記の通り、各分野の研究者に共通の問いを投げかけ、それら収集結果を分析する。そのために、まず植物、昆虫、文学、物質科学、行政学、文化社会学の6分野が対象となり、自身の分野の歴史の紹介や、個別と総体、0と1についての考えを述べる。それを踏まえ、各分野へのアンケート調査項目を決定し、実際に、各学会に協力要請を行い、大々的に調査をする。
<p align="center">5-4-3-2-1</p>	<p align="center">5-4-3-2-1</p>

筆者ら作成

表1 共同研究立案結果

	A	B
タイプ	メンバーの一つの分野を主題にし、他の分野の視点を追加する構図の共同研究	新規要素を加えて主題にとりあげた共同研究
タイトル	政策の立案方法の検討—多角的な人間理解からの生きた政策とは—	多軸の人間理解に基づくミミクリーの都市開発
背景と目的	<p>政策とは、政府が人々の生活をより良くするために行う活動である。政策の立案プロセスは、問題の認識、政策の選択、政策の実施、政策の効果の評価の4つの段階に分けられ、政府は、この政策の立案プロセスを適切に進めることで、人々のより良い生活に貢献しようとするが、根源的に、かつ、歴史的に考えてみて、これまで人間が人間のために実施してきた政策は人間の想像の域を超えていない。もちろん、それはそれでいいが、より深い人間理解に基づいた政策をもとめるとするなら、人間が人間であることを自覚するために、他者たる「何か」の観点から人間を見つめる視点を政策プロセスに含めることが有効ではないか。</p> <p>本研究では、より深い人間理解に基づく政策提案の手法創出を目標におき、これまで全く考慮されていなかった要因を政策立案に反映させることを手段とし、以下の2つの観点をもって考察することを試みる。</p>	<p>本研究では、自然界に存在する生物の形や構造、機能などを模倣して、より善き人間として暮らせる都市を検討する。自然界には、数十億年かけて進化してきた優れた形や構造、機能を持つ生物、植物が数多く存在し、これらの生物の特徴を研究し様々な技術に応用する事例は数多あるが(例：ミミクリーデザイン)、本研究で最も重点を置くのは、その目的のほうにある。今日、つい我々は、安全や快適を目標にするが、はたしてそれは善なる生き方とどう結びつくのか。本研究ではこの善き生き方の追求を第一義におき、自然や世界の有り様から人間の暮らしを見つめ直すこととする。なお、特に「都市」に着目する理由は、その存在が自然の有り様の対極とされがちだからである。果たして、都市とは何か。人間以外の目線も含めた、自然や物質の状態から、この探求に挑む。</p>
アプローチ	<ul style="list-style-type: none"> ●サイズからの脱却：ミクロの物質的世界観からの眼差し スケールング則、サイズ効果等、マクロとミクロの世界では物質の挙動、その有り様が大きく異なる(例えば、粘着力は寸法²に比例する。昆虫があんな小さな羽で飛行できるのはこの理由による。空気がドロドロなのだ)。政策分析におけるこの要素の導入は、単に個人々人にとっての政策の損得や意味合いの差異に注目するだけでなく、政策を自然物質(または環境条件)として捉えることとなり、従来とは異なる観点を我々に与えてくれるのではないか。 ●人間世界からの脱却：植物および昆虫世界からの眼差し 植物は、微小な土壌中の栄養素を吸収し大きな葉を育てる。この過程は、政策の立案に必要な多様な視点や意見を吸収し、より良い政策を実現するためのプロセスと似ている。他方、昆虫は複雑な社会を形成し、仲間と協力して生きているのではなく、単にそれぞれが好き勝手に生きているだけである。その結果として保たれている(自然の)生態系は、我々人間が半ば偽善的に平和や調和を掲げて生態系を保とうとする観念に、強烈な一撃を食らわずものではないだろうか。植物、昆虫の世界から政策を眺め、ある意味複雑系科学としての政策研究に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ●自然界からみる「暮らし」 植物、昆虫の有り様から、動物としての人間について考察を深める。加えて、人間が暮らしやすくて必要不可欠な社会性についても、取り決めごと(政策)の観点から、その有り様について考察する。人間にとって何が自然なのか。 ●歴史からみる「暮らし」 考えてみれば、我々人間が生きた時間は、電気のない状態のほうが長い。文学や歴史といった長期的視点において、善き生き方の変容について考察する。 ●物質構造からみる「暮らし」 ミクロとマクロ、その連続性のうちに我々人間の暮らしがあり、ミクロは時に個人であったり、家族であったり、マクロは時に国であったり政策であったりするが、そもそも物質世界でのミクロとマクロの差異は、まったく世界が異なるぐらい際立ったものである。本研究では、これまでまったく観点として持ち合わせていなかった物質のサイズ効果や相転移等、物質世界の現象から人間の暮らしを大胆に比較し考察を行う。
評価	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1

ご覧の通り、今回のメンバーに、植物、昆虫、物質を扱う研究者がいることから、いずれの共同研究テーマもどこかしら「脱人間」がキーワードとなった。

くしくも、この脱人間、ポスト・ヒューマンは、近年における人文科学のホットトピックでもあり、バイオテクノロジーやロボット工学、そして生成系AI等の先端技術が人間生活に及ぼす影響、または人間の限界の問題化といった文脈にて、人間―非人間の世界の有り様を論じるものである。

類似としてダナ・ハラウェイやブルーノ・ラトウールを思い出さないわけではないが、こちらは本気で植物や昆虫、そしてミクロスケールの世界の側から人間世界を見つめることとなろう。果たして人間中心主義をどこまで手放せるか。これは見ものである。

タイプDの「各自の研究を研究するようなメタ的な共同研究」は少々ずるいとも言える。なにせ、研究者が自分たち研究者を観察対象として分析するのだから。考えてみれば、理系だ、文系だ、学際だと騒ぐ前に、様々な学術分野の特性を並列に比較することが必須であろう。

著者の一人の仕事に分野特性の比較調査があるが、これはもつと世に出ている。

以上で、連載企画は終了である。いかがだったであろうか。読者のうちには物足りない、不十分と思われた方もいたかも知れない。

実際、挑戦2において当初の獲得目標を妥協せざるを得なかったのは残念であった。が、一度でも本気でそれを考えたのは大きな意味があった。議論の途中、そもそも論文ってなんだろう、業績ってなんだろうと何度も問うたのは、今日漂う、どうもメカニカルな学術評価への疑問があつたからだろう。

そして、これに関わつた研究者らは、この一連の営みをやる前と後で大きく「専門」の捉え方が変わったことを付記しておきたい。

これまでは、他分野と接する際はどこかしら身構えたものだったが、今では、「あー、あなたはそれが好きなのですね」と、ただそう感じ、受け止められるようになった。偶然の出来事、成り行き、極めて個人的な体験

……それらによって各自が各自の不思議を有し、それをただ追っているだけなのだから。

そういう意味で、各専門は、完全に平等である。というか、「専門家」である前にすべからず「探求者」であることがよほど本質なのだから、その切り口(専門)はおのずと相対化されるのだった。嗚呼、このふわつと宙に浮いた感じの脱力した専門観こそが、本来の学問の有り様たる構えであったのだ。この感慨をもって、連載を締めくくることとする。

最後に読者のみなさんへ。騙されたと思って、他分野と出会う場にもつと出向いてほしい。それが挑戦ではなく、日常となるまで。

【案内】

本連載の終了を記念して、二〇二三年一二月一八日(月)に、本稿の執筆者が集まり、その後のフォローアップを公開で行うイベントを実施します。詳細はこ



ちらまで(要申し込み)。

<https://www.suntheory.co.jp/sfnd/20231218.pdf>

【注】(1) 内閣府の総合知に関するページ <https://www8.cao.go.jp/cstp/sogochi/index.html>

(2) 本連載の第一回目の論考「学問との再契約」『アステイオン』九五号(二〇二一年一月)二二四―二三〇頁。

(3) <https://welfarewiegrow.medium.com/what-is-transdisciplinary-13c16eac5f7d>

(4) 「専門とは何か」宮野公樹、京都大学アカデミックデイ 2023 発表資料 <http://hdl.handle.net/2433/285084>

(5) 本連載の第二回目と第三回目の論考「解く理系に問う文系」『アステイオン』九七号(二〇二二年一月)一九六―二〇一頁。「納得の文系に説得の理系」『アステイオン』九八号(二〇二三年五月)二〇四―二二一頁。

(6) もちろん、新たに学会を設立するという方法もある。バイオインフォマティクスなど、いわゆる複数分野が融合し、新たな学会、新たな分野を立ち上げた事例は枚挙にいとまがない。このような学際的な新分野創出を世間は喜ぶ。だが、これは結局、また一つ「専門分野」を増やしたということに他ならない。

(7) 学術分野の比較大調査 <http://www.cptec.kyoto-u.ac.jp/project/inter-research/> 京都大学学際融合教育研究推進センターHP内

安藤妙子 (立命館大学理工学部機械工学科教授)

Taeko Ando

名古屋大学工学部航空学科卒業。同大学院工学研究科マイクロシステム工学専攻博士前期課程、博士後期課程修了。博士(工学)。日本学術振興会特別研究員、名古屋大学大学院工学研究科講師、立命館大学理工学部准教授などを経て、2021年より現職。マイクロマシンやMEMS (Micro Electro Mechanical Systems)を開発する上で必要な、材料評価や製作方法の開発などの基盤研究を行う。

後藤彩子 (甲南大学理工学部生物学科准教授)

Ayako Gotoh

東京都立大学理学部生物学科卒業。東京大学理学系研究科生物科学専攻修了。愛媛大学大学院連合農学研究科博士課程修了。博士(農学)。自然科学研究機構基礎生物学研究所特別協力研究員、同生理学研究所専門研究員、日本学術振興会特別研究員(琉球大学)、甲南大学講師を経て、2019年から現職。アリの生態を調べる研究をしている。サントリー生命科学財団「サントリー SunRISE」採択者。

櫻井悟史 (滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科准教授)

Satoshi Sakurai

1982年生まれ。立命館大学文学部卒業。同大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程修了。立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員、サントリー文化財団鳥井フェローを経て、現職。専門は、犯罪社会学、文化社会学、歴史社会学。主な研究テーマは、日本の死刑とキャバレー。単著に『死刑執行人の日本史——歴史社会学からの接近』(青弓社)がある。

プラダ・ゴウランガ・チャラン (龍谷大学世界仏教文化研究センター博士研究員)

Gouranga Charan Pradhan

1978年インド生まれ。2013年インド・デリー大学東アジア研究科修士課程修了。2019年総合研究大学院大学国際日本文化研究専攻博士課程修了。博士(学術)。2017～2018年サントリー文化財団サントリーフェロー。専門は日本文学・比較文学・日本研究で、日本の古典文学の国際的な流通と受容をはじめ、翻訳論・世界文学論に関する研究を行う。近著に『世界文学としての方丈記』(法蔵館、2022年)がある。

三谷宗一郎 (甲南大学法学部准教授)

Soichiro Mitani

1989年生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業。同大学院政策・メディア研究科後期博士課程単位取得退学。博士(政策・メディア)。サントリー文化財団鳥井フェロー、医療経済研究機構研究員などを経て、2021年から現職。専門は行政学、政策過程論。主な著作に『戦後日本の医療保険制度改革——改革議論の記録・継承・消失』(有斐閣、2022年)、『時限法の実証分析』『年報政治学』2020(1)などがある。

村田純 (サントリー生命科学財団生物有機化学研究所首席研究員)

Jun Murata

1996年京都大学農学部卒業、2002年奈良先端バイオサイエンス研究科博士後期課程修了。NEDOフェロー、カナダBrock大学博士研究員、奈良県中小企業支援センター博士研究員を経て、現職。専門は植物生化学、植物特化代謝、根圏環境生物学。植物の低分子化合物がどのような生理機能を持ち、どう作られているかを明らかにしていきたい。

宮野公樹 (京都大学学際融合教育研究推進センター准教授)

Naoki Miyano

1973年生まれ。立命館大学理工学部卒業。同大学院博士後期課程修了。カナダMcMaster大学、立命館大学、九州大学を経て、現職。専門は大学論、学問論。京都大学総長学事補佐、文部科学省学術調査官の業務経験ももつ。一般社団法人STEAM Association代表理事。近著に『問いの立て方』(ちくま新書)、『世界が広がる学問図鑑』(Gakken)の監修も。